

優秀賞『世界の国1位と最下位－国際情勢の基礎を知ろう』

桑重 湧人

「世界に存在する国々はじつにさまざまです。」本の最初でこのように述べられているとおり、現在世界には196という数の国が存在し、それぞれが独自の特色や文化を持っている。しかし、先進国のように豊かな国もあれば、発展途上国のように貧しい国もあるように、どうしても国と国との間で格差が生じてしまう。なぜ格差が生じるのか、優れた国とそうでない国とはどう違うのか。それを作者の眞さんは面積や人口などの要素別に存在する格差を、歴史的背景や地理的状況から要因を推測し、この本にまとめたのだ。

簡単に言えば、これは持つ国と持たざる国を対比させたものだ。例えば面積であれば、広大な国土を持つロシアが持つ国に分類され、バチカンなどの極小国が持たざる国に分類される。持つ国と持たざる国が分かれる最も重要な要素が最初に紹介される地勢と人口で、そこを基軸に、経済や社会などに幅を広げていくのだ。さらに、EUやタックス・ヘイブンなどは語句の意味から成り立ちまで詳しく説明されているため、初めて聞く単語でもスムーズに頭に入れることが出来る。また、1つの話題について深く掘り下げていくのもこの本の特徴である。例えば税金の話題で、国内の経済活動における政府予算の割合の高い国としてレンソが挙げられ、それに続く国としてフランスが紹介されている。「フランスは、レンソと異なり、その政府の大きさは、国民生活のためにも活用されています。」と前置きをした上で、その特徴である「社会福祉政策」を挙げている。そして、社会福祉を重要な話題として、「予算の内訳はどうか」や、「福祉関連の予算規模はどのくらいか」と、フランスの政府予算と深く関係している社会福祉の予算について大きく取り上げている。このように、1つの話題を細かく見ていくことで、各国の経済事情を深く知ることが出来るのだ。政治や経済について説明した後で触れられているのが貧困率や食料自給率などの社会問題を取り上げている。これには、これまで取り上げた地勢や経済の状況が深く関わっており、それを踏まえた上での結論となっている。これらの社会問題は各国の状況や問題点を説明するだけでなく、今後それらの国がすべきであろう課題が述べられている。すべての要素について説明した後に最後の話題となったのは、「これからの世界と日本」について

だ。ここでは世界の問題の中でも、地球温暖化やテロなどの現代的なものについて取り上げた上で、『世界標準』をつくる必要がある」と作者独自の見解を示している。この見解こそ、この本で取り上げたすべての要素から各国間の格差を考えた上で導き出した結論なのだ。

私がこの本を読んでいる時に気になったことがある。まず1つは、1つの要素で上位と下位を対比させたあとに、必ず日本の状況にも触れているところだ。おそらくこれは、上位と下位を対比させた上で日本の立ち位置について説明することで、現在の日本が置かれている状況を正しく認識してもらおうという作者の狙いがあったのではないと思われる。日本の立場といえば大まかにはどの辺りかが分かるのだが、具体的にどうしてその辺りにいるのかまでは説明するのが難しいだろう。作者の眞さんはそこに目をつけ、日本の立場と改めて理解してもらうために、上位と下位の説明の後に日本の状況を交えたのだろう。

もう1つは、この本の中で挙げられた問題が非常に現実的であるということだ。この本が最初に出版されたのは約7年前であり当時と現在では状況は違うものとするのが普通だ。当時の私は、地球温暖化や少子高齢化の問題はよく耳にすることがあったが、晩婚化や農家の高齢化の問題は耳にすることがなかった。しかし、それらの問題は現在、改善すべき大きな課題として取り上げられているのだ。作者の眞さんは過去のデータから将来起こりうる問題を推測した上で、将来に向けて必要なことを私たちに伝えようとしたのだ。おそらく、この本は日本の将来を少しでも良い方向に導くために、これからの将来を担う若い世代の人々に贈ったメッセージが詰まっているのだろう。これからの日本の経済と社会を左右するのは今の若い世代の人々であり、その人々が将来、課題を完全に解決する可能性は大いにあるだろう。しかし、世界の状況や問題を知らずに解決することは絶対に出来ない。作者の眞さんは本の最後で私たちへのメッセージとしてこう書いている。「外の世界に目を向けることの重要性」。日本は先進国であり、どちらかというとな上位に入る国だ。しかし、下位の国のことを考えて行動しなければ必ず失敗する。世界の置かれている状況を知るのに、この本は私にとってとても良い機会となった。世界の状況だけでなく、1つ1つの語句も詳しく説明してくれるので、非常に分かりやすいものだった。この本は現代の若

い世代の人に読んでもらいたい。